言語文化教育研究学会
第４回年次大会

ナラティブの可能性

2018年3月10日(土)&11日(日)

立命館大学
衣笠キャンパス

大会シンポジウム3月10日(土)13:30−16:00

ナラティブの可能性
「語り」の社会的意味

シンポジスト
小川明子
サトウタツヤ
嶋津百代
横田雅弘
北出慶子(司会)

3月11日(日)
フォーラム
パネルセッション
口頭発表
ポスター発表　など

3月10日(土)
委員企画
大会シンポジウム
口頭発表　など

参加費
会員　1000円
非会員　2000円

詳細情報
http://alce.jp/annual/

問い合わせ
annual@alce.jp

ALCE 言語文化教育研究学会
Association for Language and Cultural Education

協賛　CASIO ｜ くろしお出版 ｜ ココ出版 ｜ スリーエーネットワーク ｜ 大修館書店 ｜ 凡人社 ｜ ラーンズ

後援　日本ライフストーリー研究所 ― 共催　立命館大学大学院　言語教育情報研究科

テーマ趣旨

私たちは，本年度年次大会のテーマを「ナラティブの可能性」としました。ことばと文化の研究において，ナラティブ＝経験の語りの意味が見直されています。グローバル化は，急速に私たちの生活を変えています。一方で，社会が多言語化・多文化化し，他方で，大きな価値観の前に小さな声は掻き消されそうになります。ナラティブを研究・実践するということは，社会にある多様なことば，多様な文化を記述し，掻き消されそうな小さな声に光をあてる行為です。また，ナラティブ＝経験の語りが語られることで生まれる新しい意味もあるはずです。ナラティブの研究と実践は，このような新しい意味の創造をも射程に捉えています。

言語文化教育において，ナラティブ研究，あるいはナラティブを取り入れた社会実践や教育実践がさまざまに行われています。しかし，必ずしもそれが相互に交流し，発展しているとは言えません。本大会では，ナラティブ探求，ライフストーリー研究などの研究法を越え，社会学，心理学，教育学，第二言語習得などの領域を横断し，言語文化教育におけるナラティブの地図を描くことを目指します。さらに，ナラティブの研究と共に，ナラティブを取り入れた実践―ナラティブを語り継ぐ実践，ナラティブを語ることでエンパワメントにつなげる実践，語り合うことで新しい社会を想像・創造する実践―のあり方を議論し，ことばと文化の教育におけるナラティブの課題と可能性を浮き彫りにします。

大会シンポジウム

ナラティブの可能性ー「語り」の社会的意味ー

概要

大会シンポジウムでは，心理，異文化間教育，メディア，言語教育といった様々な観点や実践からナラティブの意義と可能性について考え，ことばと文化の教育が多様性に向き合っていくための方向性と課題について議論します。

参加方法

参加自由。事前申し込み不要。
＊予稿集は学会ウェブサイトよりダウンロードしてください（紙媒体でのご用意はありません）。２月下旬公開予定です。

シンポジスト / プロフィール

小川明子（おがわあきこ・名古屋大学大学院　情報学研究科　社会情報学専攻　准教授）
メディア論。放送局に勤めた際，局側がどれだけ真摯に報道しようと受け手側がまったく異なる反応を返したり，無関心であり続ける状況に疑問を感じ，メディア・リテラシー，市民のメディア表現をめぐる実践的な研究を続けてきた。現在は名古屋大学大学院情報学研究科社会情報学専攻准教授。メディアがグローバル化，多様化し，誰もが答えを見出せない状況に呆然としつつ，社会的包摂という理想にメディアがいかに寄与できるのかに関心を持つ。

サトウタツヤ（さとうたつや・立命館大学　総合心理学部　教授）心理学。学校法人立命館・学園広報室長。日本質的心理学会副理事長。科学的志向の強い心理学に対して懐疑的な立場をとり，心理学史や質的心理学の領域で研究を進める。『質的心理学研究』の創刊および日本質的心理学会の設立に参画。デンマーク・オールボー大学のヴァルシナー教授，立命館大学の安田裕子准教授と共に，人々のライフ（生命・生活・人生）のプロセスを描くシステム論に基づく質的研究アプローチである TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発して，質的研究の可能性を拡大している。

嶋津百代（しまづももよ・関西大学　外国語学部　准教授）日本語教育学と談話分析。ナラティブやストーリーテリングの考察を研究活動の主軸に置く。韓国・高麗大学日語日文学科を経て，関西大学外国語学部 / 外国語教育学研究科に着任，現在に至る。学部および研究科の日本語教員養成を担当。学生が潜在的に所有している教授・学習能力を引き出すことに定評あり。大阪出身。強靭な心身は，多種多彩な職業経験と長期の海外在住経験の賜物。

横田雅弘（よこたまさひろ・明治大学　国際日本学部　教授）異文化間教育学。大学で留学生のカウンセリングをしていたが，まちで外国人を支えるコミュニティーアプローチにはまり，まちづくりを志すようになった。誰もが同じ権利で住むことのできるまちを一緒につくる活動を通して，まちは多様性の宝庫であり，人種や国籍だけが異文化なのではなく，誰もが自分だけの物語をもつ「異文化」なのだと考えるようになった。ヒューマンライブラリーをゼミ活動に定めて９年。そこには異文化間教育の真髄があると感じている。

コーディネーター・司会

北出慶子（きたでけいこ・立命館大学　文学部・言語教育情報研究科　教授）

ナラティブの可能性

ALCE 言語文化教育研究学会
Association for Language and Cultural Education